

梶井基次郎

蒼穹



蒼そう

穹きゆう

ある晩春の午後、私は村の街道に沿った土堤の上で日を浴びていた。空にはながらく動かないでいる巨きな雲おおがあつた。その雲はその地球に面した側に藤紫色をした陰翳いんえいを持っていた。そしてその彪大ぼうだいな容積やその藤紫色をした陰翳はなにかしら茫漠ぼうぼくとした悲哀をその雲に感じさせた。

私の坐っているところはこの村でも一番広いとされている平地の縁へりに当っていた。山と溪たにとがその大方の眺めであるこの村では、どこを眺めるにも勾配こうばいのついた地勢

でないものはなかった。風景は絶えず重力の法則に脅かされていった。そのうえ光と影の移り変りは溪間にいる人に始終あわただ慌しい感情を与えていた。そうした村のなかでは、溪間からは高く一日日の当るこの平地の眺めほど心を休めるものはなかった。私にとってはその終日日に倦いた眺めが悲しいまでノスタルジックだった。

Lotus-eater の住んでゐるといふ何時も午後ばかりの国——それが私には想像された。

雲はその平地の向うの果である雑木山の上に横たわっていた。雑木山では絶えず杜鵑ほととぎすが鳴いていた。その麓ふもと

に水車が光っているばかりで、眼に見えて動くものはなく、うらうらと晩春の日が照り渡っている野山には静かなものうなものう懶さばかりが感じられた。そして雲はなにかそうした安逸の非運を悲しんでいるかのように思われるのだった。

私は眼を溪の方の眺めへ移した。私の眼の下ではこの半島の中心の山さんい彙からわけ出て来た二つの溪が落合っていた。二つの溪の間へ楔子くさびのように立っている山と、前方を屏風びょうぶのように塞ふさいでいる山との間には、一つの溪をその上流へかけて十二単衣ひとえのような山褶やまひだが交互に重なった。

ていた。そしてその涯には一本の巨大な枯木をその巔いただきに持っている、そしてそのためことさらに殊更感情を高めて見える一つの山が聳そびえていた。日は毎日二つの溪を渡ってその山へ落ちてゆくのだったが、午後早い日は今やつと一つの溪を渡ったばかりで、溪と溪との間に立っている山の此方側こちらが死のような影に安らっているのが殊更眼立っていた。三月の半ば頃私はよく山を蔽おおった杉林から山火事のような煙が起こるのを見た。それは日のよくあたる風の吹く、ほどよい湿度と温度が幸いする日、杉林が一斉に飛ばす花粉の煙であった。しかし今既に受精を終つ

た杉林の上には褐色がかつた落ちつきが出来ていた。瓦^ガス体のような若芽に煙っていた^ス櫂^{けやき}や檜^{なら}の緑にももう初夏らしい落ちつきがあつた。闌^たけた若葉が各々影を持ち瓦斯体のような夢はもうなかつた。ただ溪間にむくむくと茂っている椎^{しい}の樹が何回目かの発芽で黄な粉をまぶしたようになっていた。

そんな風景のうえを遊んでいた私の眼は、二つの溪をへだてた杉山の上から青空の透いて見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、不知^{しらず}不識^{しらず}そのなかへ吸い込まれて行つた。湧き出て来る雲は見る見る日に輝い

た巨大な姿を空のなかへ拡げるのであった。

それは一方からの尽きない生成とともにゆっくり旋回していた。また一方では捲きあがって行った縁へりが絶えず青空のなかへ消え込むのだった。こうした雲の変化ほど見る人の心に云い知れぬ深い感情を喚よび起すものはない。その変化を見極めようとする眼はいつもその尽きない生成と消滅のなかへ溺おぼれ込んでしまい、ただそればかりを繰返しているうちに、不思議な恐怖に似た感情がだんだん胸へ昂たかまって来る。その感情は喉のどを詰らせるようになって来、身体からは平衡の感じがだんだん失われて

来、若しそんな状態が長く続けば、そのある極点から、自分の身体は奈落のようなものなかへ落ちてゆくのではないかと思われる。それも花火に仕掛けられた紙人形のように、身体のあらゆる部分から力を失って。――

私の眼はだんだん雲との距離を絶して、そう云った感情のなかへ巻き込まれて行った。そのとき私はふとある不思議な現象に眼をとめたのである。それは雲の湧いて出るところが、影になった杉山の直ぐ上からではなく、そこからかなりの距りを持ったところにあつたことであつた。そこへ来てはじめて薄^{うっす}り見えはじめ。それが

ら見る見る巨おおきな姿をあらわす。――

私は空のなかに見えない山のようなものがあるのではないかというような不思議な気持ちに捕えられた。そのとき私の心をふとかすめたものがあつた。それはこの村でのある闇夜の経験であつた。

その夜私は提ちようちん灯も持たないで闇の街道を歩いていた。それは途中にただ一軒の人家しかない、そしてその家の燈ひがちょうど戸の節穴から写る戸外の風景のように見えている、大きな闇のなかであつた。街道へその家の燈ひが光を投げている。そのなかへ突然姿をあらわした人影が

あった。おそらくそれは私と同じように提灯を持たないで歩いていた村人だったのであろう。私は別にその人影を怪しいと思ったのではなかった。しかし私はなんということなく凝^じつと、その人影が闇のなかへ消えてゆくのを眺めていたのである。その人影は背に負った光をだんだん失いながら消えていった。網膜だけの感じになり、闇のなかの想像になり——遂にはその想像もふつつり断ち切れてしまった。そのとき私は『何処』というものがない闇に微かな戦慄^{せんりつ}を感じた。その闇のなかへ同じような絶望的な順序で消えてゆく私自身を想像し、云い知れ

ぬ恐怖と情熱を覚えたのである。——

その記憶が私の心をかすめたとき、突然私は悟った。雲が湧き立っては消えてゆく空のなかにあつたものは、見えない山のようなものでもなく、不思議な岬みさきのようななものでもなく、なんとという虚無！ 白日の闇が満ち充ちているのだということ。私の眼は一時に視力を弱めたかのように、私は大きな不幸を感じた。濃い藍色あいろいろに煙りあがったこの季節の空は、そのとき、見れば見るほどただ闇としか私には感覺出来なかつたのである。

——一九二八年二月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館